

「エグザイル」の可能性：  
<日韓・韓日>文学交流研究に向けて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/17465">http://hdl.handle.net/2297/17465</a>

# 「エグザイル」の可能性

——〈日韓・韓日〉文学交流研究に向けて——

團野光晴

1 はじめに

岐阜高専助教奥田浩司氏を研究代表者とする、日本学術振興会平成十八年度科学研究費補助金交付研究〔910—1980 〈日韓・韓日〉文学交流の歴史—〈移入〉という視座から—〕に、研究分担者として参加することとなった。本研究の目的の一つとして、自然主義や「白樺」派といった明治末から大正期の日本近代文学が、韓国近代文学の草創期に当たる一九一〇—三〇年代の韓国にいかにかへ移入されていくかを明らかにすることがある。

韓国では、いわゆる日帝「文化政治」の状況下、明治末年に日本に留学していた知識人が中心となつて、日本の自然主義・「白樺」派文学の紹介と韓国近代文学の立ち上げが行われる。この日韓／韓日の文化接触・文学交流を、韓国近代文学における日本近代文学の「影響」と言わずに〈移入〉と称するのが、本研究の特色である。〈影響〉と言うと、異文化接触の際の、ある文化から別の文化への一方

通行的な力の作用を意味してしまいがちである。そこで〈移入〉という言葉に「概念を同じくしつつも、異なる文脈に置かれることで、ズレを生み、新たな意味を持ち始めること」（〇五年十一月八日提出の研究計画調書より）という意味を持たせ、そのようなものとして文学交流を考えた上で、異文化接触の場における〈日韓・韓日〉文学双方の変容・展開を見ていこうとするものである。

これは一義的には、〈日韓・韓日〉文学交流状況の分析において、単純に日本近代文学が韓国文学に近代化をもたらしたというような、日本の植民地支配を正当化しかねない文脈に、我々研究主体が陥らないようにするためである。〈移入〉という概念を理念系とする。ことにより、日本文学を批判的に取り込むことで民族独立の闘いの一翼を担わんとした韓国の文学者の努力を確認することを、本研究は志向する。そしていわゆる「親日派」的傾向に組み込むこととは一線を画することを企図する。

同時に、日本近代文学が韓国という舞台を得ることで、日本において発揮しきれなかった可能性の片鱗を見せるということはないも

のだろうか。これもまた、本研究が期待するところのものである。

ところで本研究は、韓国における日本近代文学の「移入」が観察しやすい、韓国近代文学草創期にスポットを当てている。これは日本の明治末から大正期に当たりますが、私は主として大江健三郎氏の文学を中心に研究を進めており、専門は現代に至る日本戦後期ということになる。そのような者として本研究に参加する立場から、本研究の現代的意義について考察しておきたい。植民地支配下の韓国における「日帝」の文学の「移入」の実態はいかなるものであり、それは現代日本にいかなる経験をもたらしうるのか。それはこれからの研究の過程で明らかにされるべきものであり、今ここで確証あることが言えるわけではない。しかしそれを考えるに当たって、現代日本の状況に鑑み、どのような姿勢で本研究に臨み、何を目指そうとするべきなのか。それをとりあえず仮説的なものとしてでなり考察し、本研究に期待すべき現代的意義を見定めておくことが、研究を始めるに当たって必要なことと思われる。本稿はそのための覚え書きである。

## 2 生きている冷戦構造

さて近年、日本・中国・韓国でナシヨナリズムが高揚しつつ、主に日対中もしくは日対韓という形で対立的様相を呈する傾向が一部で見られ、その解決が望まれている。このような状況下、「朝日新聞」二〇〇六年六月四日付けの書評欄「話題の本棚」は、松本健一著『日・中・韓のナシヨナリズム 東アジア共同体への道』(〇六

年六月、第三文明社刊)を取り上げた。本記事は本文で「東アジア共同体」議論が活発である昨今、「半面、靖国参拜問題で外交は冷却し、共同体の要となる日中韓がぎくしゃくしている」との状況認識を示した上で、「政治意識の改革を説く論考」として本書を紹介する。そしてその表紙写真のキャプションで「靖国、歴史教科書、領土、憲法改正の各問題に見られる3国の「閉じられたナシヨナリズム」の解決のため、討議調整のための常設機関「アジア共同の家」を提言」するものと、本書の要旨を述べている。この紹介文による限り、本書は日中韓のナシヨナリズム対立を解決する積極的な方策を示すもので、日韓／韓日の文化接触の場における「移入」に積極的な意義を認めようとする立場からは、「移入」のあるべき姿のイメージ確立のため重要なヒントを与えてくれるものに思われた。しかし実際に本書をひもとくと、本研究の立場からすれば問題と思われる点が多々見られたのであった。今それを主に本書の結論部分である第五章「ナシヨナリズムを超えて―アジア・コモンハウス」の提唱」に焦点を絞って考えていきたい。

ここで松本健一氏は、次のように「アジア・コモンハウス」構想を述べる。

さきほどあげた食料危機、都市への人口集中、資源・エネルギー問題、環境の悪化など、東アジアが一体化しなければ解決に向かない問題が山積しています。それを共同で討議し、調整していく場の創出です。それが私の主張している「アジア・コモンハウス」構想です。

その常設機関に各国の代表が集まり、アジアをめぐるさまざまな議題や具体的な問題について話し合っていく。そうした作業を通して、互いの文化的な違いを理解したり、知識を共有したりして、同時に具体的な問題の解決策を模索していくのです。

(第五章、二〇六ページ)

続けて松本氏は、この「知識を共有」することで「具体的な問題の解決策を模索していく」という「コモンハウス」の可能性について、「二〇〇四年末に起きたインド洋の巨大津波」(スマトラ沖地震津波)を例に、津波に関する「歴史上の事実と、そのときの対応の仕方」も、コモンハウスという機関があれば、アジアでお互いに共有していくこともできるわけです」と述べ、さらに「そうしたことが、ある意味でナショナリズムを超えていくことに役立つっていくのだと思います」とする(同二〇七―二〇八ページ)。一国では対応し切れぬ問題解決のために各国が協力することを通じ、ナショナリズムを克服していくという、「アジアン・コモンハウス」の方向性が、ここでこのように示されている。

しかし松本氏は、ナショナリズムを否定するわけではない。むしろ、グローバル化が避けがたい現代世界におけるナショナリズムの意義について、次のように強調する。

経済のグローバル化をすすめる市場原理主義は、結果的に、いつも強いもの勝ちになるという可能性を生みます。すると、その国の弱い産業は国際社会から徹底的に搾取されるという状況がで

てきているのです。それは、その国の経済や通貨や、その産業に従事していく人たちの人権や生活をどう守っていくのかという問題につながっていきます。そのために、どうしても内向きなナショナリズムが強くなっていく傾向が生じてくるのです。

グローバル化が進めば進むほど、各国でナショナリズムが強くなるという相反する動きが出てくる。いっそのこと「国」というものをなくして世界政府をつくり、グローバル・スタンダード一色にしてはどうかという意見もあります。しかし、そうなるは今度は、その国の独自の文化や言語や伝統などをどうしていくのかという新しい課題が生まれるのです。(中略)

私たちは思想的にナショナリズムの危険性を指摘し、それを超えてゆく方向を探らないといけません。その一方でグローバルイズム(世界を一つにするイデオロギー)の問題点も認識していかないといけないのです。

つまり、ナショナリズムだけでも、グローバルイズムだけでもいけないということです。(同二〇九―二一一ページ)

続いて氏は「この二つのイデオロギーはまったく矛盾する方向ですが、それを同時にふまえ、また考察していかないといけない。そのためには、われわれは何をしなければならぬのかと考えたとき、アジアの伝統的な文明の中にひそんでいて新しい文明の中に生かせる理念として「共生」がある、という考え方に行き着きます」と述べる。そして「二一世紀の文明は、「自由と民主主義」という西洋近代の理念とアジアの「共生」の思想の二つを並立させていく。あ

るいは融合させていくことで健全に進むのだといえると思います」とする。ここでいう「自由と民主主義」とは、「自分と他者の間に線を引いて自分の権利を主張する。これが西洋近代を引っ張ってきた「民主」の理念」とあることから、氏においてはナショナリズムの原理とされていると見なせる。そして「ナショナリズムだけでもグローバリズムだけでもいけない」という主張の図式と、「自由と民主主義」という西洋近代の理念とアジアの「共生」の思想の二つを並立させていく」という主張の図式はパラレルなものと思なせるから、氏は「アジア」的な「共生」をグローバリズムの原理として導入しようとしていることがわかる。(以上、同二二―二二三ページ)。

この、「アジアン・コモンハウス」として打ち出される松本氏の世界像の理念は、世界が一元化され、それゆえ競争が世界規模に拡大されて激化することにより「いつも強いもの勝ちになる」ものとして通常イメージされるグローバリゼーションを、「共生」の論理で修正することで導き出されるものと言える。グローバリゼーションが「共生」として読み替えられることによって、その本来の形での進行に歯止めが掛けられ、そのため内向きのナショナリズムの高揚が抑制されて、多様なナショナリズムが対立せずに併存することになる世界として、これをイメージすることができよう。

グローバリゼーションの進展が、これと相反する内向きのナショナリズムを発生させ、ナショナリズムの危険な対立を生むという松本氏の認識は妥当であり、一般論としても広く認められているところだろう。<sup>1)</sup>そしてグローバリゼーションの弊害とナショナリズムの危険の克服を目指すという松本氏の基本的姿勢も、一般に同意でき

るものである。しかしこの「アジアン・コモンハウス」という松本氏の理念は、真の意味でグローバリズムとナショナリズムを克服しうるものだろうか。むしろそれは、グローバリズムとナショナリズムという、同根でありながら対立する二つの観念を止揚して新たな世界を開くのではなく、これから二つを中途半端な形で折衷させ延命させる余地を持つている。そこから導かれるのは、実は「共生」という大義名分の下、内向きのナショナリズムが真に外部に向けて開かれることなく残存しながら、ナショナリズムどうしが真の対話を避けることで対立を隠蔽するという、危うい妥協の世界ではないか。

この世界が成立するための条件としては、松本氏の論理から言えば、一つにはこの場合の「共生」という「アジア」的な「禁欲道徳」が遵守されることが挙げられる。しかし当の松本氏自身「世界でグローバル化が進んでいくのは避けがたい状況になっています」(同二〇九ページ)と認めているのであって、そのような状況下、果たしてこの「禁欲道徳」がどこまで通用するのか、心許ないものがある。そして往々にして「禁欲道徳」は、新興勢力に対して旧勢力が既得権を守るために説く欺瞞的なものになるのである。

またもう一つの条件としては、各国がナショナリズム対立を超えて団結し立ち向かえる対象が存在していることが挙げられる。しかしこれは、同書の「まえがき」(一―七ページ)で松本氏自身が批判している「ハンチントン(1)の罫」(「まえがき」)の記述から、自身のナショナル・アイデンティティを確立し、国内矛盾を回避するため、一国が自国外に「敵」を設定することと要約できる)が、いわば「グローバル化」した状態である。その本質は、内向きのナシ

ナリズムの克服ではなく、その一国単位を超えた形での拡大再生産であり、「テロとの闘い」「集団的自衛権」ということにも通じ合う。この本質をオブラートにくるむが如く、各国共通の「敵」の例として「津波」という自然現象を松本氏が挙げていることは、なかなか巧妙なレトリックと言わなければならない。

しかしこのように矛盾を抱えた松本氏のビジョンが、現実の問題解決のために極めて有効であるように見えることも確かである。それは、「アジア・コモンハウス」として示される世界像が、冷戦構造下の東アジア秩序によく似ているからである。その原理とは、大雑把に言えば、日本の戦争責任をもつばら「A級戦犯」に負わせることでひとまずの一件落着とした、東京裁判の原理と言えよう。ここからサンフランシスコ条約と日米安保条約が導かれ、これをバツクに日韓条約、日中共同宣言が導かれる。中韓のナショナリズムの大幅な譲歩のもとに成り立ったこのような東アジア秩序の中、日本は中韓のナショナリズムに直面することを免れたまま、経済的繁栄を謳歌したのであった。

まさにこれは、ブレ・グロバリゼーションの時代における冷戦体制が、ナショナリズムを抑制することで成立する「共生」状態である。これが松本氏の「アジア・コモンハウス」と相似形をなすことは、本書第一章で氏が「靖国問題をすっきりさせるためには、A級戦犯の政治的責任をはっきりさせることです」（同四一ページ）と述べていることから明白である。「A級戦犯」に戦争責任を負わせるだけではおさまらない中韓ナショナリズムを、アメリカをバツクに抑えつけてきたのが、他ならぬ東アジアの冷戦体制であった

からである。<sup>2)</sup>

「アジア・コモンハウス」とは、冷戦時代に対する日本の郷愁である。だが現在、「基本的価値観や政治体制などで重大な相違がある日中両国間では、歴史認識の違いを認め合うことが建設的な関係を築く出発点である。歴史認識が共有できると考えているのだろうか」（「産経新聞」〇六年九月十五日社説「主張 歴史認識 日中の違いを認め合おう」ということが言われ、グローバリゼーションの進展の中で内向きのナショナリズムが勢いを持つ。そこで「アジア・コモンハウス」が説得力を持ってしまふところに、他ならぬ現代日本の問題があると言える。今でも日本の精神に、冷戦構造は生きているのである。

### 3 「エグザイル」の可能性

このような傾向に対するオルターナティブを開く試みとして、大江健三郎氏とリービ英雄氏の「対談」異言語に身を晒す新しい文学のモデルをめぐって（「世界」〇六年九月号）がある。ここで特に注目されるのが、エドワード・W・サイードの提唱に由来するものとして大江氏が話題にする「エグザイル」という言葉である。

「エグザイル (exile) へ英」<sup>3)</sup>とは「亡命者、故郷喪失者」を意味するが、この対談ではその半ばほどの「エグザイルとしての批評性と創造性」の章で出てくる。まず大江氏が「多和田葉子さんや水村美苗さんの場合、まず言語的に故郷を失った人間として別の場所に移されて生き、一種のエグザイルとして文学をやられていると思

ます」と切り出し、リービ氏が「多和田さんは美しい日本語を書いているのでもなくて、美しいドイツ語を書いているのでもない。彼女はとにかく、国語的な権威の外へ出ようとしているわけです」と応じる。これに続けて大江氏は「どうして日本人は教育の場で『日本語』といわないで『国語』というのか。国語といった瞬間に、一種の権威を持ったものとして言葉の体系が見えてくるし、文学者もそれに倣って書いている。しかし、文学の言語はそうした権威を持つ国語であってはならないと僕は思っています」と述べ、「国語として」ではない「自分のチェコの言葉」「自分のフランス語」を使って「エグザイルとして、自分の国を失ったものとして外側にいて、しかも外側の社会の、その中心にいてのではなく、その周縁にいて書いている」文学者としてミラン・クンデラ氏を挙げる。また「自分が周縁、ボーダーにいる人間として、他のボーダーにいる人とつながりうる人」であり、「周縁にいる人間として中心に対して常に批評的であることが、エグザイルというものの役割だ」と考えていた知識人としてエドワード・W・サイードを挙げる(同五五ページ)。

またこの後リービ氏が口火を切り、安部公房に関する次のような対話が交わされる。

リービ (中略) そのときに、僕にとつてもうひとつの安部公房像が浮かんできました。僕の台湾時代もそうでしたが、侵略者の子ども、帝国の子どもとして外国で育つ。そしてその風景を自分の風景として勘違いする。安部さんの場合は、彼自身がよくいったことだと思いますが、実際に眼の前にある風景と日本の教科書

のなかに書かれている風景は完璧にズレている、そのズレが彼を作家にしたんですね。日本の川のせせらぎや桜に対して、旧満州の皓々たる砂……。若いときのそのズレの体験が決定的だった。日本に帰ってきたようで実は帰ってこなかった人として、僕はずっと安部公房という存在を考えているわけです。

たぶん彼の文学的評価においても、あの旧満州の感触が残っている間はすごい作家だったのが、後半、たぶんそれが薄れてきて、より抽象的な表現になっていった。これが僕の安部公房に対するひとつの理解の仕方です。(中略)

大江 安部さんは誰より天才的なんです。文学は、ほかの芸術分野もそうですが、他の国と出会うということに大きい影響を受けるジャンルです。日本という国の、知的な人たちを含んだ一〇〇万人を超える人間が外で生活し、また日本に帰ってくるということが起こったのは、この前の戦争前後においてだけです。それが日本文学に根本的に大きい影響を与えたことは当然です。そして、それをいちばん独特に表現したのが、あなたのいわれた時期の安部公房です。安部公房はエグザイルなんです。(中略)

大江 (中略) 安部さんは帰国してから、逆に自分はまだ帰ってきていないという気持ちを持ってたんです。

リービ そうだと思います。日本そのものを、もうひとつの満州として見立てるようになったのだと思う。(中略)

大江 (中略) 安部公房には故郷に帰るつもりはないんです。戯曲でも、北海道でエグザイル化した人間として榎本武揚たけもと たけあきを書くし、『箱男』だって世界全体のエグザイルですよ。自分を外界か

ら完全に遮断するものをつくって、そこに入って生きている。

リービ たぶん彼にとつて風土のショックが一生残っていたのだと思う。それを空想的な想像力で具象化した。『砂の女』だつてそうでしょう。あれは広大な満州の砂の風景のなかで青年時代を過ごしたことが書かせたのではないか。(中略)

いえることは、彼は最も「東アジア的」な作家だったということです。ヨーロッパ文学の翻訳などいろいろ読んでるんですが、基本的には日本と満州、あるいは島国と大陸の関係の中で書いている。(中略)とにかく、日本から中国へ行って何か文学的な大きなものを持って帰ってくるというのは、安部公房が初めてやった。(中略)

大江 (中略) 彼は全てを失って、裸のけものとして帰ってきた。そして、日本に自分の国というものを発見しなかった。彼は共同体も信じなかった。その意味では「帰国」していなかったし、エグザイルとしてずっと生きて文学を作り続けた。「東アジア人としての安部公房」という視点が文学研究の中で打ち出されてくることを僕は願っています。

(同五八〜六〇ページ「安部公房の満州、安部公房の日本」の章)

以上のように見てくれば、松本氏の「アジアン・コモンハウス」のような、ナシヨナリズムとグローバリズムの妥協的な折衷案を超える理念として「エグザイル」をイメージすることが可能と言えるのではないか。つまり「エグザイル」は、「自分の国を失ったものとして外側において」、内向きのナシヨナリズムに同調することはな

く、「しかも外側の社会の、その中心に在るのではなく、その周縁に」いて、グローバリゼーションに順応しその権威の階梯を登り詰めるようにする類のコスモポリタン(日帝の手先としての韓国の「親日派」は、これに相当しよう)にもならない。それは、失われた「故郷」のイメージを拠点として、グローバリゼーションに対抗しつつ、ナシヨナリズムをも異化する。

ここで安部公房の例で言えば、彼は失われた「故郷」である満州のイメージによつて日本を描き出し、「日本そのものを、もうひとつの満州として見立てる」ことで、日本対満州の図式を止揚し、「東アジア」としての新しい日本のイメージを作り出した。それは、故郷喪失者として、あらかじめ固定化された「故郷」のイメージに執着するナシヨナリズムから自由でありつつ、「他の国と出会」い続けながら「故郷」のイメージを絶えず刷新し、これをより豊かにしていく実践である。この場合、「故郷」は、失われているがゆえにより豊かなものとして繰り返し「再生」してくるダイナミズムを持つ。このようなものとしての「故郷」こそ、ナシヨナリズムの排他性とグローバリズムの弱肉強食とともに克服する、真の多様性を許容する万人の「故郷」へとつながる世界のイメージではないか。そしてそのような世界を「故郷」とする者こそ、自己喪失に陥らずに真に他者と出会うことができ、新しい人間の可能性を切り開く「エグザイル」なのだと言えよう。

この「エグザイル」のモラルを言い当てたものとしては、近年のもので言えば柄谷行人氏が『倫理21』(二〇〇〇年二月、平凡社刊)で唱える、「自由であれ」「他者をも「自由な」主体として扱え」と



いう「至上命令に従う」ということが挙げられよう。これは柄谷氏  
がカントの命題として紹介するものである。人間は本当は自由では  
なく、他によって規定されているが、それでも自他ともに「自由」  
であろうとすること。それは民主主義のモラルと言つてよいだろう。  
それはまた、丸山眞男が「『である』ことと『する』こと」で六〇  
年安保闘争をまたぐ時期に唱えた「日々自由になろうとすることに  
よつて、はじめて自由でありうるということ」、「自由と同じように  
民主主義も、不断の民主化によつて辛うじて民主主義でありうる」  
ということに通じる。<sup>3)</sup>

本来ナシヨナリズムとは、民主化に連なるナシヨナリズム、すな  
わち自由を奪われた者たちが抑圧者に異議申し立てを行い、自他と  
もに自由である世界を求める闘いを力を合わせて行つた際の団結の論  
理として、いわば「エグザイル」のナシヨナリズムという逆説的な  
あり方において承認されるべきだろう。それは、持てる者の既得権  
擁護の論理（松本氏の言う「西洋」的な「自由と民主主義」を原理  
とするナシヨナリズムは、これに類しよう）という内向きのものにな  
つてはならず、適切な再分配のあり方を追求するための開かれた  
論理（これが本来の民主主義であろう）につながるべきではない。  
その点、六〇年安保闘争は、当時篠原一氏によつて「わが国の政治  
史上はじめてデモクラシーとナシヨナリズムが結合しなかったのじ  
やないか」と評された。<sup>4)</sup>ちなみに松本健一氏は『日・中・韓のナシ  
ヨナリズム』第五章で六〇年安保闘争を「アメリカからの自立を希  
う国民運動」「ナシヨナリズム運動としての六〇年安保闘争」と評  
している（同一七八〜一八〇ページ）。しかし松本氏は、六〇年安

保闘争が国民運動として未曾有の盛り上がりを見せたのが、一九六  
〇年五月十九日の岸信介内閣による安保改正強行採決後であったの  
を、きちんと見ていないように見える。それは単なる「反米」とい  
うことではなく、民主国家たる日本を勝ち取る運動としての可能性  
を持つていた。そこにあったのは、デモクラシーという普遍的価値  
に向かおうとする、「エグザイル」のナシヨナリズムだったと言  
べきではないか。

「若い日本の会」の一員として六〇年安保闘争に加つた当時、  
大江健三郎氏は「強権に確執をかもす志」ということを言つた。<sup>5)</sup>近  
年の小説『憂い顔の童子』（〇二年九月、講談社刊）で改めて六〇  
年安保を問題にした大江氏が現在述べる「エグザイル」とは、この  
「強権に確執をかもす志」が円熟したものだだろう。そして「エグザ  
イル」のナシヨナリズムという観点から見れば、大江氏がその文学  
世界で外国文学の引用を伴いつつ繰り返し描く「谷間の村」も、未  
来に向けて新しく異化され「再生」されていく「故郷」であると言  
える。「谷間の村」の差異と反復をたどるということも、改めて興  
味深い研究テーマとして浮上してくるように思われる。

#### 4 真の人間どうしの出会いに向けて

失われた「故郷」を繰り返す、より多様性を許容する豊かなもの  
として「再生」しようとするのが、「エグザイル」のナシヨナリス  
ムの精神である。その最も成功した具体例の一つとして、独立運動  
以来の伝統を受け継いで展開した韓国の民主化運動を挙げることが

できるのではないか。だとするならば、韓国ナショナリズムは、民主主義という普遍的価値に連なるものとして、日本人にとっても大変意義深いものである。その出発点の一つをなすものとして、韓国近代文学の濫觴における日本文学へ移入<sup>レ</sup>が立ち現れてくることを、この研究に期待したい。へ移入<sup>レ</sup>とは自己喪失ではなく、異文化接触の場における自己変革であり、そのことを通じて、異文化にも変革を迫るものである。それは普遍的な人間の価値に連なる真の意味での異文化間の対話であり、既成の文化から人間を解放して、真の人間どうしの出会いと経験をもたらすものと言えよう。

この異文化間の対話として「文化政治」下の韓国の日本文学へ移入<sup>レ</sup>を考えたとき、その伝統に連なる現代のへ日韓・韓日<sup>レ</sup>文学としてまず挙げなければならないのは、在日コリアン女性作家李良枝の「由熙」(「群像」一九八八年十一月号。八九年二月、講談社刊)であろう。日本で生まれ育ち、日本語で自己形成した在日二世韓国人女性の李由熙は、祖国韓国に近づくべく、韓国語を学び、ソウルに留学し、留学生特別枠で韓国の最高水準の大学であるS大学国文学科に入学する。しかしその韓国語はぎこちないままで、由熙はついに祖国になじめず、自己欺瞞に耐えかねて卒業を目前にしながら大学を中退、日本へと去る。だが彼女は、ソウルでの下宿先の家の娘である三〇代半ばの独身韓国人女性「私」との対話を通じて、韓国社会に新しい局面を切り開いていたのだった。

「私」は由熙に、「同胞」として早く祖国韓国になじんでもらおうと気を使い、いろいろ世話をし、韓国語を教えたりもする。由熙と「私」は「本当のきょうだいたい仲が良」く、「私」自身由熙の

ことを「妹のように思っていた」。しかし、一向に韓国社会になじまず、韓国語も上達せず、ややもすると韓国の悪口を言い、日本語の書物を読みふける由熙に、「私」は苛立ちを感じ、時にはきつく当たってしまうこともあった。

だが、「私」には読めない日本語で書いた長文の手記を「私」のもとに残して由熙が去っていった後、由熙と過ごした日々を複雑な思いを抱きつつもいとおしく思い出すうち、「私」には「自分、まるで医師のように由熙と対していたのかも知れない、そんなことも思い返した。処方箋もなく、治療をしているという意識もすっかりとしない医師だったのかも知れなかった。治療……、だがそれにしても、治療とは何と不確かだ無責任で傲慢な言葉だろう」という反省も訪れるのだった。

そして結末部分、自分の発声する「ア」の音が、韓国語の「아」なのか日本語の「あ」なのかわからない、ことばの杖が掴めないと言った由熙のことを思いだしているうち、「私」に次のようなことが起こる。

うしろに向き返り、階段の前に立った。足許がはつきりとせず、重心がとれなくなつたようにふらついた。

小さな塊がぐらりと動いて弾け、由熙の顔が浮かんだ。

——아  
私はゆっくりと瞬きし、呟いた。

由熙の文字が現われた。由熙の日本語の文字に重なり、由熙が書いたハンガルの文字も浮かび上がった。

杖を奪われてしまったように、私は歩けず、階段の下で立ちすくんだ。由熙の二種類の文字が、細かな針となって目を刺し、眼の奥までその鋭い針先がくいこんでくるようだった。

次が続かなかった。

叶の余韻だけが喉に絡みつき、叶に続く音が出てこなかった。

音を捜し、音を声にしようとしている自分の喉が、うごめく針の束に突つかれて燃え上がっていた。

今まで「私」は、韓国語で由熙と対話をすることで、由熙という人間を理解したつもりでいた。だがここで「私」は、由熙の韓国語が、自分には理解できない日本語を背後に秘めた言葉であったことに気づいたのだ。しかし、そのような由熙の韓国語も韓国語には違いないと思いついたとき、それまで韓国人の自分にとって「自然」なものとしてすっかり理解しているつもりでいた韓国語が、にわか理解不能な、外国語のようによそよそしいものと思われ、「私」は言葉をうまく使えなくなってしまうたのである。ここで「私」は、エグザイルたる在日である由熙の言葉によってエグザイルの場に引きずり出され、自らエグザイルとなり、改めてエグザイルどうしとして、真の意味で由熙と出会うのである。

そしてことは韓国人側にとどまらない。このラストシーンを読み終えた後、この日本語で書かれた『由熙』という小説が、実は日本語がわからない韓国人の「私」の回想録という体裁を取っており、従ってこの小説の日本語が背後に韓国語を秘めたもので、しかもその韓国語は現実には存在せず決定的に到達不能な言葉であることに

思い至った日本人読者がいたとしたらばどうだろうか。その者は、はたして自分は本当にこの小説をしつかりわかって読んできたのだろうかという疑いを募らせると同時に、背後に自分の決して到達できない言葉を秘めたこの小説の日本語もしかし日本語には違いないと気づく。そして果たして自分は本当に日本語がわかっていたのでろうか、そもそも日本語がわかりきることがあるのだろうかという疑問とともに、にわかにならぬまま「自然」なものだった日本語がよそよそしいものを感じられ、自分が何人であるのかわからなくなってしまうことに、言葉を失いながら慄然とするはずなのだ。

『由熙』は日本人読者をエグザイルの場に引きずり出し、あらゆる虚飾を排した真の人間であるエグザイルとの出会いへ導き、真の人間の経験へといざなう力を持った傑作である。

本へ移入」研究においても、『由熙』の読書体験に類する「日韓・韓日」におけるスリリングなエグザイル体験を発見し、その可能性を示すことを目指したい。先ほども話題にしたリービ英雄氏はまた、中国からカナダ・バンクーバー経由でニューヨークに入るうとした際に「9・11」に遭遇し、「米国に入れず、日本にも戻れず、1週間カナダに滞在した」体験を回想して「18、19歳から30年近く旅を続けてきたが、世界的規模の暴力で旅を中断された初めての体験だった」と評している。戦争は異文化間の国境を封鎖し、人々を国境の内部に帰属させ、エグザイルの存在を許さないものであることがよくわかる。そのような時代に、ささやかながら希望の光を投げ掛けることができればというのも、本研究に向かうに当たっての願いである。

注

(1) 小熊英二氏も、グローバリゼーションとナショナリズムは「対立関係というより、共犯関係だと考える」として、「グローバリゼーションによる格差の拡大を嘆き、国家を擁護する論者」の存在を指摘、「一九三〇年代のドイツや日本、現在の第三世界などに明らかだが、民衆を巻き込んだ草の根ナショナリズムも、格差に耐えかねた人々が、国家権力による再分配を期待した場合に台頭しやすい」と述べている(『グローバリゼーションの光と影』、『毎日新聞』二〇〇二年三月四日夕刊)

(2) 高橋哲哉氏は著書『靖国問題』(二〇〇五年四月、ちくま新書)で、「東京裁判の重大な問題性は、そこで裁かれたものよりも、むしろそこで裁かれなかったものの方にある」として、「A級戦犯」が裁かれたのに、原爆投下などの米国の戦争犯罪が裁かれず、また日本の植民地支配から解放されたばかりの朝鮮が戦勝国と認められなかったため裁判に参加できず、米英仏蘭など植民地宗主国でもあつた戦勝国に日本の植民地支配を裁く意図も能力もなかったと、東京裁判の問題点を指摘している。一方「現実問題としては、日本が連合国による占領状態から主権を回復し、国際社会に復帰することを可能にしたサンフランシスコ講和条約において、日本政府が連合国による戦犯裁判の「判決」を受諾している、という事実がある」とし、中国政府の立場も「侵略戦争を指導した『日本軍国主義者』以外の日本『人民』は、中国『人民』と同じように、日本軍国

主義の被害者であつた」とするもので、「戦争指導者のみを問題とし、実際に侵略行為を行なつて中国人民を傷つけた日本軍兵士については、『日本軍国主義者』によつて戦争に動員された『被害者』と見なすというこの立場は、実際に被害を受けた中国人民から見れば大幅な政治的譲歩であろう」と指摘する。その上で「A級戦犯分祀論は靖国問題における歴史認識を深化させるものではなく、むしろ反対にその深化を妨げるもの」とし、「分祀論」が「A級戦犯に主要な戦争責任を集中させ、彼らをスケープゴート(犠牲の山羊)にすることで

昭和天皇が免責され、圧倒的多数の一般国民も自らの戦争責任を不問に付した東京裁判の構図に瓜二つ」であること、さらにA級戦犯は「満州事変」以降の戦争責任者として裁かれたのであり、「靖国問題において歴史認識が問われる際、それを『戦争責任論』のパスベクトイブで論じるかぎり、事実上は『満州事変』以前のすべての戦争が見落とされることになるざるをえない」ことを指摘している(同第二章「歴史認識の問題―戦争責任論の向うへ」一六八―一八〇ページ)。

(3) 「『である』ことと『する』こと」は一九五八年十月『岩波文化講演会』での講演。初出『毎日新聞』五九年一月九―十二日。『日本の思想』(六一年十一月、岩波新書)に改稿収録。

(4) 石田雄・坂本義和・篠原一・隅谷三喜男・田口富久治・日高六郎・藤田省三・丸山眞男「共同討議 現在の政治状況―何を為すべきか」、『世界』一九六〇年八月号。

(5) 「強権に確執をかもす志」、『世界』一九六一年七月号。

(6) 二〇〇六年十月六日「京都国際会議2006」オープニング・シンポジウム「芸術がデザインする平和のかたち」(於京都市立芸術大講堂)における基調講演。「朝日新聞」〇六年十月十四日。

付記 本稿は、平成十八年度科学研究費補助金基盤研究C「1910-1930 〈日韓・韓日〉文学交流の歴史―(移入)―という視座から」の成果の一部である。なお本稿を金沢大学国語国文学会事務局宛に送付したのは二〇〇六年十月二十日であったが、その後姜尚中氏が『愛国の作法』(同年十月三十日、朝日新書)を上梓されたことを知った。氏は同書百四十七頁で、「ナシヨナリズムは、本来、「不動性の観念」と結びついた「パトリア」とは違って、逆に「故郷離脱(エグザイル)」から生まれたのです」と述べ、この箇所を含む章の見出しを「故郷離脱者たちのナシヨナリズム」とされている。これは表現レベルにおいては、本稿で用いた「エグザイル」のナシヨナリズム」という言葉に近い。しかし同書百四十八頁に「故郷離脱」によって創建された統一的な国民国家」とあることからわかる通り、姜尚中氏は「故郷離脱者たちのナシヨナリズム」を国民国家形成の原理としている。そこでむしろ本稿の「エグザイル」のナシヨナリズム」は、本質的には、姜尚中氏が「国境を「下から」超える」可能性を持つものとして打ち出す「開かれた「郷土」(同百五十六ページ)」という概念に近くなると思われる。ただ氏の「開かれた「郷土」が、政治学者の提唱らしく、具体的に実現可能なコミュニケーションのビジョンとしての感触を専ら持つのに対し、本稿の「エ

グザイル」のナシヨナリズム」は、より抽象的な文学・文化的レベルでの可能性の提示にシフトしたビジョンとして位置づけられよう。